

水がたまりやすい地形で、都市化が進展し土地の保水機能が低下しています。

■ お皿のような地形で、盆地の唯一の出口は狭窄部

奈良盆地の大和川は放射状に河川が集まり、盆地内で合流しながら1本の流れとなり、生駒・金剛山地に挟まれた亀の瀬を抜け、大阪へ流れます。

奈良盆地は四方を山地に囲まれ、平野部が窪地になっている典型的な低平地です。そのため地形的にも雨水がたまりやすくなっています。



四方を山地に囲まれお皿のように真ん中が窪んでいる奈良盆地

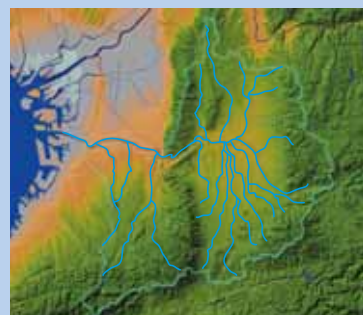
昔は「湖」だった奈良盆地

約300万年前から100万年程前まで、奈良盆地から京都盆地南部にかけ「古奈良湖」といわれる湖がありました。約200万年程前、二上山の麓で起こった大規模な地滑りで川がせき止められ古奈良湖の水位が上昇、湖の流れは亀の瀬付近から流れ出ました。そこに大和川の原型が生まれたと想像できます。



利水目的で付替えられた奈良盆地の大和川

奈良盆地では古代から中世に実施された条里制(土地区画制度)により、利水目的で川の付替えが多く行われていました。そのため、大和川は河川が南北に平行に走り、自然地形に反した不自然な流れが多く見られます。



現在の河川

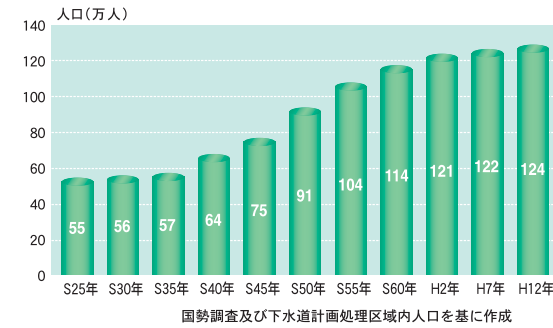


旧河道の復元

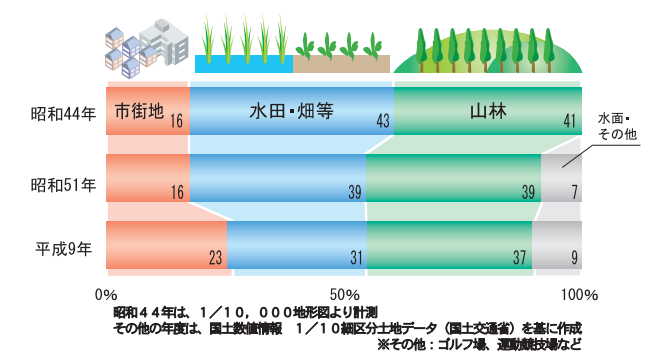
■ 人口増加で市街化が進んだ奈良盆地

奈良盆地は京阪神地区に隣接し、交通の利便性も高いことから、昭和30年代後半から人口が増加、地域開発が急速に進展しました。そのため、森林や水田・ため池などが宅地や工場、商業施設等に生まれ変わり、盆地の中で市街地の占める比率が高くなってきました。

■ 流域内人口の推移(奈良県)



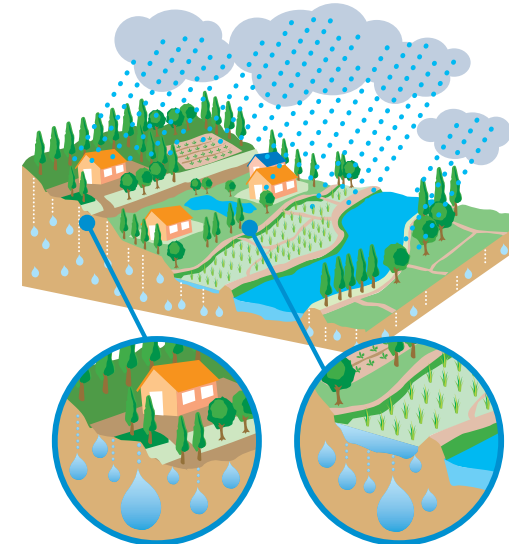
■ 奈良県内の土地利用の推移



■ 低下する土地の保水機能

むかしは

山、森林、田んぼ、畑がスポンジのように水を吸い込んでいたので、雨が降ってもすぐに川の水が増えることはありませんでした。

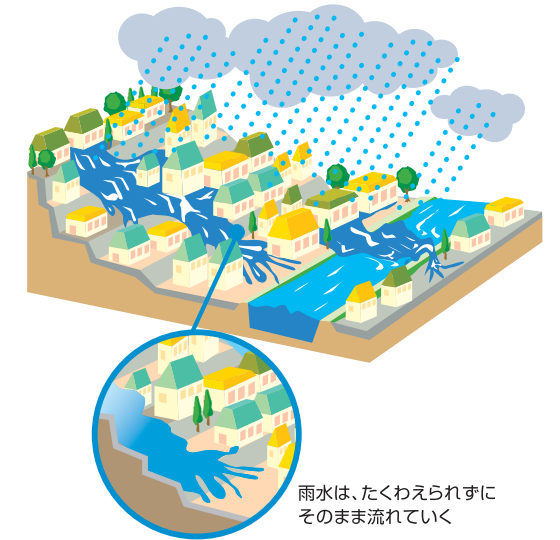


雨水を地中にたくわえる

雨水を水田にたくわえる

最近では

ビルや建物がたくさんできて、地面がコンクリートやアスファルトで覆われるようになったので、降った雨がそのまま川へ流れ出て、洪水が起こりやすくなっています。



雨水は、たくわえられずにそのまま流れていく



近鉄生駒駅付近(昭和23年)



近鉄生駒駅付近(平成15年)

※水田や山林が宅地開発されたようす